



パラグアイ  
República del Paraguay



## グローバル・サプライチェーンにおける パラグアイへの期待と可能性

西澤 裕介 (JETRO ブエノスアイレス事務所長)

パラグアイは、人口約750万人、国土面積は日本の約1.1倍の40万6752km<sup>2</sup>の小国だが、アルゼンチン、ブラジル、パラグアイ、ウルグアイの4か国で構成される南米南部共同市場（メルコスール）諸国の中でも「フロンティア市場」といえる国だ。筆者は普段、アルゼンチンの首都ブエノスアイレスで生活しているため、パラグアイで起きている変化を日常的に肌で感じることはできないが、同国から熱気が伝わってくる。本稿では、筆者が今年初めて同国を訪問して感じた同国の可能性について述べたい。

### グローバル・サプライチェーンと パラグアイの可能性

本年9月8日から9日にかけて、パラグアイの首都アスンシオン市において同国政府主催の投資フォーラム「Invest in Paraguay」が開催された。マリオ・アブド・ベニテス大統領をはじめ、主要経済閣僚と中銀総裁らが出席し、国内外の投資家に向けてパラグアイへの投資を呼び掛けた。

投資フォーラムに出席した米州開発銀行（IDB）のマウリシオ・クレバー・キャローン総裁（当時）は冒頭、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の蔓延やロシア

のウクライナ侵攻によるサプライチェーンの分断が世界経済に大きな影響を与えている状況下でIDBが掲げるニアショアリングという概念におけるパラグアイの重要性について触れた。ニアショアリングとは、消費地の近くに供給源を移転することを指し、その必要性から生じる機会は、パラグアイの財・サービスの輸出額を短期的に2億5000万ドル押し上げる効果があるとIDBは試算している。特に林業、繊維産業、農業・食品、医薬品製造、自動車部品製造、知識集約型サービスなどの分野で可能性があるとしている。クレバー・キャローン総裁は実例として、パラセル（パラグアイ、スウェーデン・セルロース製造）、CTCグローバル（米国、高圧送電ケーブル製造）、後述する萩原工業（日本、コンクリート補強繊維製造）のパラグアイへの投資を挙げた。パネルディスカッションに参加したルイス・カスティグリオニ商工相も、グローバル・サプライチェーンにおけるパラグアイの役割に言及。中国への依存を減らすためにもEUとの自由貿易協定の締結・発効が重要との見解を示した。

世界、米州、あるいはメルコスールのサプライチェーンにパラグアイ

が貢献するうえでどのような強みがあるのだろうか。パラグアイの投資環境上の強みとしてこれまでもよく聞かれるのが、豊富で安価な労働力、簡易な会社設立手続き、シンプルな税制、フリーゾーンやマキラ制度など輸出産業向けの恩典などによるオペレーションコストの低さだが、本稿では以下、サプライチェーンにおけるパラグアイの可能性について概観する。



写真1 アブド・ベニテス大統領も出席（筆者撮影）

### 経済発展を支える若く豊富な人口

若く豊富な労働力は、数あるパラグアイの強みの中でも、今回の訪問で話を聞いた企業関係者や投資フォーラムに登壇した企業関係者が共通して評価する強みだ。人口の中央年齢は25.90歳とラテンアメリカ主要国の中で最も若い。生産年齢人口（15～64歳）が従属人口（14歳以下の年少人口と65歳以上の老年人口の合計）の2

倍以上ある状態の期間を人口ボーナス期と呼ぶが、パラグアイはこの人口ボーナス期を2040年から2050年にかけて迎える（表参照）。人口ボーナス期は、豊富な労働力により個人消費が活発になり、高齢者が少ないことから社会保障費用が抑えられるため、経済が拡大しやすくなる。パラグアイはこの人口ボーナス期をラテンアメリカ主要国で最も遅く迎える国でもある。豊富な若年人口は安価な労働力の供給を可能にし、労働集約型の産業を支えている。一方、中間管理職や技術職、英語人材の不足を指摘する声が進出日系企業から多数聞かれることから、より高度な製造業や知識集約型サービスなどの担い手も育成する必要があるだろう。

### グリーン水素、グリーンアンモニア供給基地としての可能性

パラグアイとブラジルが共同で出資して建設したイタイプ水力発電所は、世界最大規模の再生可能エネルギーによる発電所だ。干ばつによる発電量の低下や送電ロスが大きいなどの課題はあるが、安価かつクリーンなエネルギーを安定的に供給することができるのがパラグアイの強みだ。同国の電源別発電設備容量の99.99%は再生

可能エネルギーだが、エネルギー消費全体に目を向けると、薪などのバイオマスが43%、化石燃料が41%、電力が16%と、再生可能エネルギーの利用は進んでいない。その一方で、電力の71%が輸出されている（2018年）。そこで政府は、「パラグアイ・持続可能なエネルギー・アジェンダ2019-2023」を策定し、余剰電力の有効活用の検討に着手。2021年には水素政策のコンセプトペーパー「パラグアイにおける水素の道に向けて」を策定し、グリーン水素の開発が動き始めた。



写真2 イタイプダム（ブラジル側より筆者撮影）

英国のアトムエナジー(ATOME Energy)が、パラグアイでのグリーン水素の生産に乗り出している。同社のピーター・レヴィン社長は投資フォーラムに登壇し、2023年からグリーン水素の生産を開始すると発表した。同社は、パラグアイにおいて400MWのグリーン水素製造を計画しており、アスンシ

オン市から35km離れたヴィジェタに用地を取得し、パラグアイ国営電力公社（ANDE）と電力購入契約（PPA）を締結した。同社はもともと、パラグアイで炭化水素の探査を行っていたが、パラグアイの持つグリーン水素の可能性に気づき、その生産に乗り出したという。ANDEのフェリックス・ソサ総裁も投資フォーラムにおいて、ANDEはこれまでにグリーン水素に関する複数の協力覚書（MOU）を外国企業と締結しており、グリーン水素をモビリティに活用するとともに、水素からアンモニアを製造することで、肥料を域内外に供給し、食料安全保障にも貢献できると述べた。

イタイプダム周辺でもグリーン水素に関連したプロジェクトの検討が進んでいる。イタイプ技術公団（PTI）は、イタイプダム近くに低炭素産業経済区（ZEIBC）を設置するべく準備を進めており、ZEIBCを通じてグリーン水素の生産などの分野で外国直接投資の誘致を目指している。

先述の「エネルギー・アジェンダ」は、化石燃料の大部分を消費しているモビリティへのグリーン水素の活用の可能性を指摘した。一方、「コンセプトペーパー」は、パラグアイに水素経済を導入する際の課題のひとつに水素を用いたビジネスモデルが国内に存在しないことを挙げている。パラグアイで水素を製造することだけでなく、国内あるいは近隣国に需要を作り出すことにもビジネス機会があるのかもしれない。

### 食料供給基地としてのポテンシャル

パラグアイは、輸出額に占める農林畜産品の割合が約7割と高く、

表 ラテンアメリカ主要国の人口ボーナス期

	2020年	2025年	2030年	2035年	2040年	2045年	2050年
ラテンアメリカ・カリブ諸国	2.04	2.04	2.01	1.98	1.93	1.86	1.77
メキシコ	1.99	2.03	2.05	2.04	1.99	1.94	1.88
コロンビア	2.20	2.16	2.08	2.03	1.97	1.88	1.77
ペルー	1.99	1.96	1.90	1.89	1.86	1.80	1.71
ブラジル	2.30	2.23	2.14	2.06	1.98	1.84	1.69
アルゼンチン	1.79	1.81	1.83	1.85	1.84	1.79	1.74
パラグアイ	1.80	1.85	1.89	1.96	2.03	2.05	1.99
ウルグアイ	1.82	1.78	1.75	1.74	1.70	1.65	1.62

注：生産年齢人口を従属人口で割って算出。網掛けのセルが人口ボーナス期。  
出所：国連「The Population Prospects the 2019 Revision」より筆者作成。

世界の農林畜産品貿易に占める割合も大きい食料輸出大国だ。国連貿易統計データベースの2021年の世界各国の品目別輸出数量を比較すると、パラグアイは、大豆（世界第3位）、大豆油（同3位）、大豆粕（同5位）、トウモロコシ（同12位）、小麦（同25位）、牛肉（同10位）、牛皮（同5位）、その他の採油用の種及び果実（同4位、主にチアシード）、ゴマ（同9位、2020年）、米（同10位、2020年）で上位を占めている。国土面積が小さく人口も少ないにもかかわらず、パラグアイの世界の食料輸出における存在感は大きい。そして、豊富な水資源と未開かつ肥沃な国土が十分にあるため、食料資源のさらなる開発余地もある。



写真3 広大な平地が広がる（カーグアスにて筆者撮影）

### 大国ブラジルに近接する好立地 —国境都市シウダード・デル・エステの可能性

パラグアイは「南米のへそ」と呼ばれるように南米大陸の中央に位置しているが、その立地上の強みは大国ブラジルとの近接性に集約されていると言っても過言ではないだろう。

筆者は、投資フォーラムが行われるアスンシオン市へ向かう前に、パラグアイ東部のシウダード・デル・エステ（以下、エステ市）を訪れた。同市はブラジルのフォス・ド・イグアス、アルゼンチン

のプエルト・イグアスとパラナ川を挟んで隣接し、ブラジルとは陸路で繋がっている。免税で買い物ができるため、ブラジルから多くの買い物客が訪れることで知られる商業都市だ。商業施設はブラジルからの買い物客に合わせたビジネスアワーのため、早い店舗は6時開店、15時閉店、遅い店舗は18時には閉店する。治安は良好とは言えず、市中心部では行動に注意が必要だ。

しかし、中心部を離れば同市の別の顔、すなわち工業都市とし



写真4 エステ市中心部の様子（筆者撮影）

ての可能性や優れた住環境が見えてくる。合成樹脂繊維大手の萩原工業（本社：岡山県倉敷市）は今年6月、主力製品であるコンクリート補強繊維の製造拠点を同市に新設すると発表した。同社は国境から11km地点にある工業団地「Complejo Empresarial Global」（以下、CEG）に立地予定で、主にブラジル向けに製品を供給する。CEGには2011年にワイヤーハーネス製造のフジクラが進出済みで、同社もブラジルに向けて製品を供給している。パラグアイには、ブラジルの高いビジネスコストを回避するため、多くのブラジルの労働集約的な製造業が進出している。いわゆる「ブラジル・プラスワン」の戦略だ。CEGはエステ市では数少ない工業製品の製造

業に特化した工業団地だが、CEGによると、エステ市の強みは消費市場ブラジルへの近接性だ。首都アスンシオン市はエステ市から約350km離れており、輸送手段は陸送に限られている。両市を結ぶ国道2号線の複線化工事が進んでアクセスは徐々に改善しているが、エステ市の立地上の優位性は明らかだ。

エステ市郊外には外国人や富裕層の居住区として、囲いで覆われてゲートで入退出を管理する住宅街「ゲートッド・コミュニティ」が整備されている。パラナ・カントリークラブがその代表例だ。エステ市の意外な一面だった。

### 様々な課題も伸びしろのある証

パラグアイには強みや可能性だけでなく弱みもある。ひとつは市場規模の小ささだ。進出日系企業のほとんどは国内市場向けのビジネスはしておらず、ブラジル向けやアルゼンチン向けのビジネスを手掛けている。輸送インフラにも課題がある。パラグアイの国土は海に面していないため、物流はパラナ川の国際河川輸送と陸上輸送によるが、干ばつによるパラナ川の水位の低下は国際河川輸送に大きな影響を及ぼしている。人材面については製造業の歴史が浅いことから先述のとおり中間管理職、技術職、英語人材の確保が難しく、進出日系企業の中にはブラジルから連れてきているところもある。また、10年以上、同一雇用主に継続雇用された労働者の解雇補償金の金額が大きく、解雇が難しくなるため、勤続年数が10年を超えると欠勤が増えたり能率が下がったりすることを懸念する声も聞かれる。裾野産業がないため、

労働集約的な製造業以外は現地調達に困難が伴うとの指摘もある。密輸が経済にビルトインされているなど地下経済の大きさも同国の課題だろう。課題の多さは、言い換えれば改善の余地と大きな伸びしろがあるということでもある。陸上インフラは先述のとおり、幹線道路の複線化が進んでいる他、パラグアイ北部チャコ地方を横断してチリのアントファガスタとブラジルのカンポ・グランデを結ぶ全長 2290km の自動車道「南米大陸横断回廊」の建設も着々と進ん

でおり、太平洋、大西洋を結ぶ新たな物流網の整備が期待される。労働法上の規定についても進出日系企業は従業員のモチベーションを高める様々な創意工夫を行って



写真5 幹線道路の複線化工事が進む(コロンネ・オビエドにて筆者撮影)

いる。

パラグアイをよく知る人に話を聞くと、パラグアイはものすごい勢いで成長し、変貌しているという。百聞は一見に如かず。ぜひ同国を訪れ、同国の持つ可能性を見ていただきたい。

(にしざわ ゆうすけ 独立行政法人  
日本貿易振興機構 [ジェトロ]  
ブエノスアイレス事務所 所長)

## ラテンアメリカ参考図書案内



### 『廃墟の形 《フィクションのエル・ドラード》』

ファン・ガブリエル・バスケス 寺尾隆吉訳 水声社  
2021年7月 496頁 3,500円+税 ISBN978-4-8010-0586-0

20世紀のコロンビアで流血の歴史を代表する三大事件といえばラファエル・ウリベ・ウリベ（自由党上院議員の将軍、1914年に農民風のテロリストに殺害された）と大統領選挙の有力候補者ホルヘ・エリエセル・ガイタン暗殺とそれをきっかけに起きたボゴタ暴動、対メディリン・カルテル戦争とパブロ・エスコパールの死であろう。ガイタンは1948年4月9日に首都ボゴタ有数の繁華街にあった事務所から出て来たところをナチス・シンパと目された若者が至近距離から銃弾を撃ち込んで暗殺したが、犯人はその場で殺害されたことから黒幕がいるという陰謀説が消えなかったものの検証は途中で打ち切られた。同じようにウリベ暗殺の時にも、遺族の依頼を受けたアンソラ弁護士が真相究明に奔走したが、告発は陰謀でもみ消されたので彼は検察調査書を基に『いったい誰だ?』という小冊子を書き遺した。

著者の分身とも見られる「私」が、今は博物館に改装されたガイタン邸から2014年に陰謀論者のカルロス・カルバージョという若者（この小説のために設定された架空の人物）が、暗殺当時に着ていた背広を展示していたショーケースのガラスを割って服に手をかけたところで駆けつけた警備員に取り抑えられたという報道に接した時からこの大部な小説は始まる。その後カルバージョからガイタン暗殺の真相を執筆するようもちかけられ、ウリベ殺害報告書を読むよう薦められた。後半はアンソラの告発とそれを糊塗するための陰謀の応酬が大きな割合を占めていて、長い小説の最後は、「私」の主治医ベナビデス医師が法医学者だった父親から引き継いだガイタンの脊椎の一部をカルバージョが医師宅から盗み指した物を返す代わりに「私」が執筆を引き受けるとの交渉の場面で終わる。カルバージョが「私」に語る「実はどちらの暗殺も同じ犯人の仕業だった。もちろん同じ個人、同じ手口という訳ではなく、同じ怪物がこれまですでに何度も殺人を犯し、これからも人殺しを続けるだろうということ。この国では何世紀にもわたって事態は何も変わっていないし、今後変わる見込みもない」という言葉が、著者が言わんとしたコロンビア政治の裏にある核心を突いているように思われる。（桜井 敏浩）